

2015年度

電子映像表示の実現90周年

公益財団法人 高柳健次郎財団

高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞



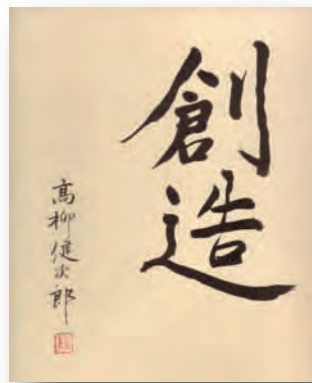
恒に夢を持つこと
志をすてず”
難きにつく

昭和38年1月3日

高柳健次郎



高柳健次郎 書齋にて



よい科学者、好術者である
まことによい人間であれ
高柳健次郎

公益財団法人 高柳健次郎財団

設立

故高柳健次郎氏が文化勲章の授章に際して、「決して私一人の力で成しえたことではありません」と謙虚に述べ、「初期の研究過程において、研究費の不足に困ったとき助けられた有難さを今も忘れることがない」と感謝の気持ちを表している。そして、これまでに多くの方々から受けたご恩に報い、併せてわが国の電子科学技術の振興に些かなりとも貢献できればと念願し、設立されました。



高柳健次郎の功績 「世界で初めてブラウン管による電子表示に成功」

高柳健次郎博士は、電子式テレビジョンの実現を目指して研究し、1926年12月25日に世界で初めてブラウン管を用いて電子映像表示に成功した。

当時、イギリスでは、1925年にベアードが送受信ともニポーの回転円板を用る機械式テレビジョンの実験に成功、翌年には機械式テレビジョンの公開実験を行っていた。他方、米国、欧州各国などでもテレビジョンの実現に向けた様々な試みが行われていた。

高柳は、機械式では精細な画像表示ができないと判断して、映像を電子的に撮像・表示する電子式テレビジョン技術の開拓に挑戦し、浜松高等工業学校で研究を進めた。1924年12月に電子表示のために独自に開拓した熱陰極ブラウン管の試作を芝浦電気(株)(現東芝)に依頼した。撮像はニポーの円盤で画像を走査し、高速電子回路を開拓して電子映像を作った。1926年12月25日、雲母板上に書いた「イ」の字を、世界で初めてブラウン管上に電子的に表示することに成功した。時あたかも大正天皇が崩御され、その号外新聞発刊の鈴の音を聞きながらであった。こうして、世界初の電子式テレビジョン受像器を実現、それはまた、世界初の電子映像表示装置(ディスプレイ)の達成であった。高柳は1927年には真空管式の撮像管の特許出願を行うなど、その後は電子式テレビジョン放送の実現・発展に貢献した。

他方、アメリカでは、1927年、フィロ・フランスワースが電子式テレビジョンの特許を申請し、1933年にツボルキンがアイコノスコープ(撮像管)を発明し、受像には高柳が達成したブラウン管方式が用いられて、電子式テレビジョンが開拓されていった。

現在、高柳が開拓した電子映像ディスプレイは、テレビジョンの映像表示のみならず、電子機器の発展につれて「人間と機械の対話装置」へと発展し、パソコンやスマートフォンなどの情報通信端末のキーテクノロジーに進化し、現在の情報通信技術社会の発展を支えている。



「イ」の字の表示に用いられたブラウン管

● 目的・事業

当法人は、電子科学技術に関する独創的な研究開発に対し研究助成を行い、また優れた研究業績者を表彰することにより、わが国の科学技術の振興に寄与し、豊かな社会の創造に貢献することを目的としています。その目的を達成するため、下記の事業を行っています。



理事長 末松安晴

〈 高柳健次郎賞 〉

電子科学技術に関する優れた研究により、わが国のこの分野の振興並びに産業の発展に貢献された方々の功績に報い、電子科学技術の更なる発展とその啓蒙に寄与することを目的とした賞です。

- 高柳健次郎賞 1件 表彰盾並びに記念のメダルを贈呈
- 高柳健次郎業績賞 2件 表彰盾並びに副賞として賞金を贈呈

〈 研究奨励賞 〉

将来の発展が期待される独創的な研究に取り組む若い研究者に助成し、わが国の電子科学技術の振興並びに産業の発展に寄与することを目的としています。

- 研究奨励賞 3名～5名 表彰盾並びに副賞として研究助成金を贈呈

〈 科学放送高柳賞 〉

科学技術の振興とその知識の向上に役立つ優れた科学放送番組を奨励し、番組内容の向上に寄与することを目的とした賞です。優れた科学放送番組を放送した放送局を表彰しています。

- 最優秀賞 1件 表彰盾を贈呈
- 優秀賞 2件 表彰盾を贈呈

〈 未来技術フォーラム 〉

電子科学技術の分野で次世代の発展に寄与する最先端の技術や話題をテーマに、年3回開催しています。但し、本年度は休止いたします。

〈設立許可〉

- 1984年(昭和59年) 10月31日 内閣総理大臣・国務大臣科学技術長官より、民法第34条の規定に基づく公益法人として許可を受く。
- 2010年(平成22年) 3月29日 内閣総理大臣より、公益法人認定法第44条の規定に基づく公益財団法人として認定される。
- 2010年(平成22年) 4月 1日 公益財団法人高柳記念電子科学振興財団として法人登記。
- 2011年(平成23年) 5月19日 公益財団法人高柳記念財団へ名称変更。
- 2013年(平成25年) 6月 5日 公益財団法人高柳健次郎財団へ名称変更。

受賞発表

高柳健次郎賞

研究奨励賞

科学放送高柳賞

2015年度 高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞 受賞者

〈贈呈式〉2016年1月20日(水) アルカディア市ヶ谷 5F 穂高の間

高柳健次郎賞	<p>宮原 秀夫 氏</p> <p>〈研究業績〉 コンピュータネットワークに関する先駆的研究と高度ネットワーク利用の普及への貢献</p>
高柳健次郎 業績賞	<p>柏野 邦夫 氏</p> <p>〈研究業績〉 音・映像メディア情報の解析と検索に関する研究開発</p>
	<p>西田 幸博 氏</p> <p>〈研究業績〉 スーパーハイビジョン映像方式の研究開発と標準化</p>
研究奨励賞	<p>安在 大祐 氏</p> <p>〈研究課題〉 インプラント医療通信における大容量画像伝送に関する研究</p>
	<p>久保 亮吾 氏</p> <p>〈研究課題〉 ネットワーク化制御システムにおける適応的QoS保証技術</p>
	<p>真部 雄介 氏</p> <p>〈研究課題〉 ユビキタスセンシング環境に基づく人物および行動認識に関する研究</p>
科学放送高柳賞 最優秀賞	<p>● 番組名</p> <p>SBS防災特別番組「富士山鳴動す一火の山の危機と予知一」</p> <p>〈放送局〉 静岡放送株式会社</p>
科学放送高柳賞 優秀賞	<p>● 番組名</p> <p>「トキ 新世界を生きる」</p> <p>〈放送局〉 株式会社新潟放送</p>
	<p>● 番組名</p> <p>NHKスペシャル「腸内フローラ～解明!驚異の細菌パワー～」</p> <p>〈放送局〉 日本放送協会</p>

高柳健次郎賞

「コンピュータネットワークに関する先駆的研究と 高度ネットワーク利用の普及への貢献」



宮原 秀夫 氏

(大阪大学名誉教授 元総長 現在 大学院情報科学研究科・特任教授 1943年生)

[略歴] 1973年 工学博士(大阪大学)
1980年 大阪大学 基礎工学部 助教授
1989年 大阪大学 基盤工学部 教授
1995年 大阪大学 大型計算機センター長
1998年 大阪大学 基礎工学研究科長
2002年 大阪大学 情報科学研究科長
2003年 大阪大学 総長
2007年 独立行政法人情報通信研究機構 理事長
2013年 大阪大学大学院 情報科学研究科 特任教授 現在に至る。

● 主な受賞等

電子情報通信学会 論文賞(1991年) 業績賞(1999年) 功績賞(2008年)
IEEE(米国電気電子学会) フェロー(1997年) ラーフエロー(2009年)
通商産業大臣賞(1997年)
第6回エリクソン・テレコミュニケーション・アワード(2002年)
総務大臣賞(2003年)
日本放送協会 放送文化賞(2013年)

〈主な業績内容〉

宮原秀夫氏は、米国でのARPANETプロジェクト発足当初より、国内でもいち早くコンピュータネットワークにおけるパケット交換技術の回線交換技術に対する優位性に着目し、それを明らかにすることにより、コンピュータネットワークの基本交換システムに大きな変革をもたらした。具体的には、コンピュータネットワークに対して、回線交換原理とパケット交換原理を適用した場合の性能比較評価を行い、パケット交換原理の優位性を理論的に証明した(1978年IEEE Trans. Comm.)。この論文の結果を発展させた研究はその後、多くの研究者によってなされ、多くの論文でたびたび引用され、その研究成果は、現在のコンピュータネットワークのアーキテクチャの決定に対して多大な影響を与えた。

その後、企業や大学などでの導入が広まり始めた小規模なコンピュータネットワーク(LAN)を対象とした研究にも着手し、高速で効率のよい構内通信システムを構築するための通信制御手法を明らかにした。具体的には、LANにおける多重アクセス制御方式であるCSMA/CD方式、トークンパッシング方式などのモデル化と性能評価を行い、それらの性能特性を明らかにした。一連の研究は、その後のLANシステムの開発に対する大きな指針となったものである。現在、LANは構内における分散処理システムの基盤技術としてだけでなく、インターネットへのアクセス手段としても重要な技術となっているのは周知の通りである。

さらに、1980年代後半からは、高速広帯域なマルチメディア通信を実現する通信方式として非同期転送モード(ATM)方式の研究にもいち早く取り組んだ。企業との共同研究により研究開発したATMスイッチ技術は、国際的な標準化機関であるATMフォーラムへ寄書を提出するとともに、共同研究相手先メーカーの製品として採用され、実用化への道を大きく拓いた。さらに、大阪大学において、ATMスイッチを用いたキャンパスネットワークを構築・運用することによって、その実用性を証明した。すなわち、理論的貢献だけでなく、技術開発、さらにはその実用化まで取り組んだところに、宮原秀夫氏の学術的活動の特徴があるものである。なお、このキャンパスネットワークは、ATMスイッチを用いたものとして世界最大規模のものであり、諸外国からも見学者が訪れるなど世界に先んじた先鋭的な取り組みであった。

また、コンピュータネットワークの理論的研究成果を実証する場として、ネットワークの構築やネットワークを利用した高度情報処理技術を開発するだけでなく、それらを応用したマルチメディアシステムを開発するなど幅広い活動を行っている。具体的には、マルチメディアプレゼンテーションシステムのためのハイパーテキストとオブジェクト指向の概念を組み合わせた新しいモデルを提唱し、それに基づくシステム(Harmony)を実装し、マルチメディアシステムのあり方を示した。国内でも他の研究者に先駆けてコンピュータネットワークにおける分散型マルチメディアシステムの可能性に着目し、取り組んだ一連の研究活動の成果は、同分野におけるその後の研究活動に大きな影響を与えた。

さらに、情報通信研究機構理事長として、インターネットの先を見据えた新世代ネットワーク基盤の研究開発に世界に先駆けて着手した。その結果、欧米諸国やアジア諸国との連携や国際標準活動を通じて、新世代ネットワークの研究開発に関する国際的イニシアティブを確保しつつあり、我が国の情報通信分野の競争力を強化するとともに、世界的な情報通信分野の発展にさらに寄与している。

高柳健次郎業績賞

「音・映像メディア情報の解析と検索に関する研究開発」



柏野 邦夫 氏

(日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所・上席特別研究員 1967年生)

[学歴] 1995年 3月 東京大学大学院 工学系研究科 電気工学専攻 博士課程修了 博士(工学)

[職歴] 1995年 4月 日本電信電話株式会社 基礎研究所

2008年10月 国立情報学研究所 客員教授(～現在)

2014年 7月 日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所 メディア情報研究部長(～現在)

2015年 4月 日本電信電話株式会社 上席特別研究員(～現在)

2015年 6月 東京大学大学院 情報理工学系研究科 客員教授(～現在)

● 主な受賞等

2002年 5月 電子情報通信学会 業績賞

2004年 6月 IEEE Transactions on Multimedia Paper Award

2007年 4月 科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞

2010年 3月 前島賞

〈主な業績内容〉

莫大な量の音や映像が流通し共有される時代を迎え、メディアコンテンツの適正な活用の促進が極めて重要になっている。柏野邦夫氏は、1990年に音楽に含まれる音楽的事象の包括的記述を目指す「音楽情景分析」の研究を立ち上げた後、1995年から現在まで、これに加えて、音や映像などメディア情報に対する高速検索と、その重要な基礎技術である「メディア探索」の研究を主導し、当該技術の確立と実用化に多大な貢献をしてきた。

1. メディア探索技術の萌芽への貢献

従来、音や映像などのメディア情報の探索では、文字列の探索とは異なり、メディア情報の大容量性のために、その処理に非常に時間がかかることが課題であった。同氏はこの問題の重要性にいち早く着目し、1998年に、音や映像などの時系列メディア情報の探索を、その精度を犠牲にすることなく大幅に高速化する技術を考案した。時系列アクティブ探索法と呼ばれるその技術は、特徴の頻度分布のもつ性質を利用することで、同一の探索結果を厳密に保証したまま総当たり法の数百倍に高速化するものであり、この分野の重要なブレイクスルーとなった。

2. メディア探索技術の頑健化への貢献

メディア情報の探索におけるもう一つの技術的課題は、メディア情報に特有の曖昧性や変動のしやすさのため、探索のための正確な照合が難しいことであった。これに対し、同氏らの研究チームでは、2000年から2005年にかけて、メディア情報の探索を、雑音、編集、加工などの変動に対して著しく頑健にすることに成功した。ロバストメディア探索法と呼ばれるその技術は、粗く量子化された局所特徴を選択的に用い、時空間的配置を利用して候補を絞り込むという斬新な手法によって著しい頑健性を実現した。これにより、メディア探索の適用範囲が、それまでのように変動の少ない高品質な信号だけではなく、実環境でとらえた音や映像や、編集や加工が加えられた音や映像などにまで大幅に広がった。

3. メディア探索技術の実用化への貢献

以降、大量のメディア情報が流通する時代を迎える中で、同氏らの努力により、現在に至るまで、メディア探索技術の高速性、頑健性、精緻性は更に大幅に進歩してきた。現在では、例えば、わずか数秒程度の短い音の断片に部分的に含まれるごく小音量の背景音楽が、データベースに蓄積された数百万曲のうちのどの曲のどの箇所であるかを瞬時に特定することや、動画投稿サイトで共有される動画に含まれる既知のメディアコンテンツを全数規模でチェックすることなどが可能となった。

現在、同氏らによる技術に基づいて、例えば

- ・放送番組やコンテンツ配信において使用された楽曲や効果音の著作権管理
- ・大量の投稿動画に含まれる既知の映像・音楽の使用状況の特定
- ・スマートフォンで放送番組の音や画面をとらえることによる、放送とネット情報との連携

などの処理基盤が構築され、広く実用に供されている。さらに最近では、同氏らのメディア探索技術は音楽情景分析の技術をも包含し、類似の音楽パターンを検索するなどの応用の実現にも成功している。

このように、同氏の業績は、現代社会におけるメディアコンテンツの適正な流通と多様な活用を支えるものであるとともに、理論、技術、実用化にまたがるひとつの技術体系として、今後のメディア情報処理分野の発展にも大きく寄与するものである。

高柳健次郎業績賞

「スーパーハイビジョン映像方式の研究開発と標準化」



西田 幸博 氏

(日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 上級研究員 1961年生)

- [学歴] 1985年 3月 慶應義塾大学大学院 工学研究科 電気工学専攻 修士課程修了
2013年 9月 電機通信大学 大学院 情報システム学研究科 後期博士課程修了
- [職歴] 1985年 4月 日本放送協会入局 甲府放送局技術部
1988年 8月 日本放送協会 放送技術研究所
2000年 5月 日本放送協会 技術局計画部 チーフエンジニア
2003年 6月 日本放送協会 放送技術研究所 主任研究員
2014年 4月 日本放送協会 放送技術研究所 上級研究員

● 主な受賞等

- 2011年 6月 日本ITU協会賞 功績賞
2011年 9月 IBC2011 Best Conference Paper Award
2015年 1月 前島賞

〈主な業績内容〉

西田幸博氏は、超高精細度テレビジョンの映像方式の研究開発と国際標準化、そして、超高精細度テレビジョン放送の導入に取り組んできた。

スーパーハイビジョンに代表される超高精細度テレビジョン(UHDTV)は、ハイビジョン(HDTV)を凌駕する高臨場感や視聴体験の提供を目指して開発された究極の二次元テレビジョンである。UHDTVは、画素の高精細化に加え、カラーテレビジョンの色を表現する表色系や、動きの再現性を特徴付ける時間解像度についても新たな技術パラメータ値が採用され、さらに、ダイナミックレンジの拡大が検討されている。

同氏は、特に超高精細度テレビジョンの表色系の研究に取り組み、要求条件の設定から広色域表色系の設計、そして、広色域表色系に対応したカメラやディスプレイの開発に至る研究を主導した。同氏の研究グループは、実物に近い色再現によって質感の向上を図るため、色域や表現方法などについての要求条件を検討し、これらを満足する表色系として、スペクトル軌跡上の単波長光源(レーザー)に相当する色度点を三原色とする広色域表色系を設計した。これによって、実在する物体の最大色域を代表するポインターカラーの包含率は、HDTV表色系が74.4%であるのに対して、99.9%以上を達成した。さらに、同氏の主導の下、広色域表色系に準拠したカメラやディスプレイを開発した。カメラプリズムの分光感度特性を広色域表色系に基づいて新たに設計・製作し、8Kスーパーハイビジョン広色域カメラを開発した。また、広色域表色系に準拠した表示装置として、光源をRGBレーザーとした8Kスーパーハイビジョンプロジェクタや、液晶ディスプレイのバックライトをRGBレーザーとした直視型ディスプレイを開発した。これらによって高彩度の色の忠実な撮影・表示を可能とし、広色域表色系の有効性と実現性を実証した。

同氏は、超高精細度テレビジョンの映像方式の国際標準化において、ARIB放送国際標準化ワーキンググループ座長並びに情報通信審議会放送業務委員会専門委員として、ITU-Rへの提案文書を取りまとめると共に、ITU-R第6研究委員会(SG6)副議長としてスーパーハイビジョンの映像方式の勧告作成を主導した。広色域表色系を含むUHDTVの映像方式を2009年10月にITU-Rに提案し、審議を経て、2012年8月にITU-R勧告BT.2020が承認・発行された。その後、同方式はARIB標準規格STD-B56やSMPTE規格ST2036-1にも採用された。

8Kスーパーハイビジョンのデータレートは、高精細化と高フレーム周波数化によって、従来のHDTVの100倍近くに上る。同氏は、このような大容量の映像データをスーパーハイビジョン機器間で伝送するための新たなインターフェース方式を考案した。同氏の主導の下、同インターフェースの国内外での標準化を進め、電波産業会(ARIB)標準規格STD-B58、米国映画テレビ技術者協会(SMPTE)規格ST2036-4、国際電気通信連合無線通信部門(ITU-R)勧告BT.2077が策定された。

さらに同氏は、超高精細度テレビジョン衛星放送方式の策定においても、ARIB作業班主任並びに情報通信審議会作業班委員として、映像符号化方式の策定を主導した。この中で、画質の主観評価実験によって放送品質を満足するためのビットレートを導出し、広色域やフレーム周波数120Hzを含む4K/8Kの映像符号化方式を策定した。この技術基準に基づき、現在、2016年の試験放送、2018年の実用放送に向けて準備が進められている。

研究奨励賞



● 研究課題

「インプラント医療通信における 大容量画像伝送に関する研究」

安在 大祐 氏

(名古屋工業大学大学院 工学研究科 情報工学専攻 助教 1983年生)

〈研究概要〉 近年、無線通信機能を持つインプラント型の医療機器による高度医療の実現が非常に注目を集めている。無線インプラント医療機器の最も実用化が進んでいるカプセル内視鏡では、撮影した消化器内部の動画データ伝送においてデータ速度は数百kbpsと大容量伝送方式は確立されておらず、数Mbps以上を実現するインプラント無線通信技術の確立は解決すべき急務な課題となっている。

安在大祐氏は本課題解決に対し3.4 - 4.8 GHzのUWB (Ultra WideBand) に着目し、インプラント通信で実用化されていなかった高周波数帯による高速化技術を確立した。安在氏は UWB帯のインプラント通信で問題となる人体によって生じる無線信号減衰に対しては変調方式や送受信アンテナの最適化により対策を行い、インプラント機器側に複数搭載可能な超小型アンテナを開発することでMIMO (Multiple-Input Multiple-Output) 技術をインプラント通信に適用し、従来技術から大きく伝送速度を向上させることに成功した。

UWBインプラント通信の試作システムを用いた生体(豚)によるインプラント伝送実験では、インプラント無線通信の大容量化の達成を実証し、今後のインプラント医療通信の発展に大きく寄与した。



● 研究課題

「ネットワーク化制御システムにおける 適応的QoS保証技術」

久保 亮吾 氏 (慶應義塾大学 理工学部 電子工学科 専任講師 1983年生)

〈研究概要〉 多数のセンサ、アクチュエータが通信ネットワークを介して接続され、遠隔環境において情報収集および機器制御を行うネットワーク化制御システムは、産業システムの自動化や遠隔医療など次世代のスマートシティ/コミュニティを支える基盤インフラ技術である。

久保 亮吾氏の本研究は、低コストで多様な通信サービスを提供できる公衆ネットワークにおいて、通信サービス品質(QoS: Quality of Service)をネットワーク環境の変化に応じて適切に制御することで、低消費電力かつ高信頼、高精度なネットワーク化制御システムを実現することを目的としている。

これまでに、制御工学的アプローチにより通信トラフィックを考慮して適応的に通信機器のスリープ制御および帯域制御を行うことにより、通信ネットワークの低消費電力化および低遅延化を実現した。また、通信遅延およびパケット損失の制御的補償により、ネットワーク化制御システムの高信頼化、高精度化を実現した。

本研究の特色は、制御工学と情報通信工学の融合により、通信ネットワークのQoS(通信遅延、パケット損失、消費電力)を適応的に保証しつつ、不可避のQoS劣化に対して制御的な補償を加えることによりネットワーク化制御システムの高信頼化、高精度化を実現している点である。

本研究の提案を、機械システムのみならず電力システム、情報システムに適用することで、次世代のスマートシティ/コミュニティの実現に大きく寄与することが期待される。

研究奨励賞



● 研究課題

「ユビキタスセンシング環境に基づく人物 および行動認識に関する研究」

真部 雄介 氏（千葉工業大学 情報科学部 准教授 1980年生）

〈研究概要〉 スマートフォンやタブレットPCなどに代表されるような通信端末には、カメラや加速度センサ、ジャイロ스코ープなど様々なセンサが内蔵されている。また、我々の生活環境にもカメラや人感センサ、温度センサなどが様々な場所に設置されており、それらの「モノ」がインターネットと接続されるIoT (Internet of Things) とよばれるユビキタスセンシング環境が急速に進展しつつある。このような環境で期待されているのは、高齢者や子供の見守り、職場における勤怠管理やコミュニケーション・人間関係の見える化、省エネ行動促進などの幅広い応用の実現である。

真部雄介氏は、そのような応用を実現するためには、多種多様なセンサ情報をもとに人間の行動や個人を特定する基礎技術が必要不可欠となると考え、スマートフォンに内蔵された加速度センサの情報から人間の歩行状態を推定し人物を特定する研究や、環境に設置した複数の加速度センサや照度センサ、赤外線センサの情報からモノの動きを特定し、間接的に人物行動を推定する研究を行っている。前者は、平地だけでなく階段昇降時の歩行状態でも人物識別を可能とした点に特色がある。また、後者は、人物を直接追跡することなく周囲の環境の変化から行動を特定している点に特色がある。

研究奨励賞 研究成果論文

当財団では、研究奨励賞贈呈者に対して、受贈後の2年間での研究成果について報告をお願いしています。報告された研究成果論文は、当財団のホームページで公開いたします。

本年度は、2012年度贈呈者の研究成果論文をホームページに公開いたしました。

延兼 啓純 氏（北海道大学大学院 理学研究院 物理学部門 助教）

● 研究課題 「カイラル超電導によるトポロジカル量子演算素子の開発」

田中 一晶 氏（大阪大学大学院 工学研究科 知能・機能創成工学専攻 特任助教）

● 研究課題 「手の触感を再現する携帯型遠隔握手デバイスの開発」

木村 貴幸 氏（日本工業大学 工学部 電気電子工学科 助教）

● 研究課題 「スマートグリッドシステムに対するカオスダイナミックスを用いた最適制御手法の提案」

ホームページ <http://takayanagi.or.jp> 研究奨励賞 をご参照ください。

科学放送高柳賞 最優秀賞

番組名 SBS防災特別番組 「富士山鳴動す—火の山の危機と予知—」

●放送局:静岡放送株式会社 ●放送日:2014年12月13日(54分)



2014年9月、58人の命を奪い、戦後最悪の火山災害となった御嶽山の突然の噴火は、日本人に火山の恐ろしさを知らしめると同時に、「噴火予知の現実」と「突然の噴火にどう備えるべきか」という課題を突き付けました。同時に私たち静岡放送のスタッフの頭に巡ったのは、「富士山で噴火が起きたらどうなるのだろうか?」という思いでした。

取材を始め分かったのは美しく、雄大な富士の姿は火山活動の賜物だということ。遠くからの眺めとは裏腹に、近づけばその秘めた自然の力が岩石や地形から見て取れます。

富士山はここ1,200年の間に10回噴火しているといわれます。しかし、最近300年噴火していないという現実が登山者や住民に「火山」という認識を鈍らせます。

番組では子どもでも理解できる実験を通じ、活火山・富士山の成り立ちを解説。

一方で、御嶽山の異変に気付きながらも、予知に至らなかったこの国の現実に迫りました。東日本大震災以降、火山の活動期に入ったともいわれる日本列島で富士山が突然、火の山に姿を変える日は、そう遠くないのかもしれませんが。静岡発のローカルな目線から「日本人と火山との付き合い方」について真剣に考えた報道番組です。

科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 「トキ 新世界を生きる」

●放送局:株式会社新潟放送 ●放送日:2015年3月21日(47分)



学名、ニッポニアニッポン「トキ」は、日本において野生生物の絶滅から再生への物語を、はっきり示すことのできる稀有な存在である。最後の生息地、佐渡で一斉捕獲されてから27年、人工繁殖により、2008年をはじめ放鳥された。生態に関する研究は進んでおらず、予測できないトキの動きに人々は振り回された。

今回の番組は、放鳥以降のトキの生態について継続して取材を行ったもの。最初の放鳥個体の驚くべき広範囲の移動や、年間を通じた田んぼでの生態…冬からの羽色の変化、春の繁殖期、夏の子育て、秋の食べ物を巡る行動、厳しい冬を乗り切る姿。さらに中国陝西省洋県のトキ…1,200羽に達した野生下の姿を見つめ、これからの日本のトキの方向性を探る。

数少ない貴重なトキの保護のため場所、時期、撮影方法すべてに制約があり、また中国取材にはなかなか許可がおりず、ようやく2015年の3月に放送することが出来た。遠かった存在の「トキ」は田んぼというきわめて人間に近い場所に密接に結びついた生き物であったことに改めて気づかされる。人の生きる環境を考えるためにも「トキ」は欠かせない存在であることを感じ取っていただければ幸いである。

科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 NHKスペシャル 「腸内フローラ ～解明! 驚異の細菌パワー～」

●放送局:日本放送協会 ●放送日:2015年2月22日(49分)



私達の健康にとって、本当に大切なことは何か?この番組は、世界最先端の研究を丹念に取材し、「腸内細菌」の秘められたパワーに迫ったものです。肌のシワ・肥満などの身近な話から、がん・糖尿病・うつ病まで。腸内細菌のパワーを活かす研究は、様々な分野に広がっています。きっかけは遺伝子解析技術の進歩。ヒトの腸内にはシャーレの上では培養できない「未知の菌」が大量に住んでいて、我々の健康を左右するさまざまな物質を作っていることが分かってきたのです。現場ドキュメントと高品質のCGを組み合わせたVTRや視聴者目線に引き寄せた親しみやすいスタジオ演出を駆使して、単に健康情報に止まることなく、私達の体に潜む“神秘的で尊いメカニズム”をお伝えすることに力を注ぎました。番組は大きな反響を呼んでい

ます。放送後、民放や雑誌が特集を組み、関連書籍が多数出版されました。企業や研究現場でも、腸内細菌研究のプロジェクトが組まれるなど、社会に“腸内フローラブーム”が巻き起こっています。番組をきっかけに、従来の医学や医療に無かった、新たな健康の形が広がりを見せ始めています。

■ 放送期間/2014年9月1日～2015年8月31日 ■ 応募放送局/13局 ■ 応募番組数/16番組

入賞番組の一般公開

本年度の入賞番組は、財団法人放送番組センターが運営する、放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」において、後日、一般に無料で公開することとなりました。

◆放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」のご案内

- 場 所 横浜情報文化センター 8F
神奈川県横浜市中区日本大通11 TEL.045-222-2828
(交通アクセス)みなとみらい線「日本大通り駅」3番出口(情報文化センター口)直結
JR根岸線・横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩10分
- 開館時間 10時～17時 (視聴受付は、閉館30分前まで)
- 休 館 日 毎週月曜日(祝日・振替休日の場合は、次の平日)、年未年始

財団法人番組放送センターの「放送ライブラリー」は、放送法に基づく、わが国唯一の放送番組専門のアーカイブ施設であり、NHKと民放のテレビ、ラジオ番組とCMを公開しています。

詳細は、ホームページ <http://www.bpcj.or.jp/> をご参照ください。

歴代受賞一覧

高柳健次郎賞

研究奨励賞

科学放送高柳賞

■ 高柳健次郎賞・受賞者一覧 (1985年度～2012年度 高柳記念賞)

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2014年	大場吉延	日本放送協会	元 理事
2013年	白井克彦	放送大学学園	理事長
2012年	安田浩	東京電機大学 未来科学研究科	委員長・教授
2011年	泉武博	日本放送協会 放送技術研究所	元 所長
2010年	青木利晴	株式会社NTTデータ	シニアアドバイザー・元社長
2009年	相磯秀夫	東京工科大学	理事・前学長
2008年	金子尚志	日本電気株式会社	名誉顧問
2007年	長谷川豊明	日本放送協会	元 専務理事・技師長
2006年	辻井重男	情報セキュリティ大学院大学	学長
2005年	立川敬二	独立行政法人 宇宙航空研究開発機構	理事長
2004年	安田靖彦	早稲田大学 理工学部	教授
2003年	嵩忠雄	大阪大学	名誉教授
2002年	中村好郎	日本放送協会	元 副会長
2001年	中原恒雄	住友電気工業株式会社	特別技術顧問
2000年	長尾真	京都大学	総長
1999年	林宏三	日本放送協会 放送科学基礎研究所	元 所長
1998年	熊谷信昭	大阪大学	名誉教授
1997年	斎藤成文	東京大学	名誉教授
1996年	藤尾孝	大阪工業大学	客員教授
1995年	岩崎俊一	東北工業大学	学長
1994年	野村達治	日本放送協会	元 専務理事・技師長
1993年	植之原道行	日本電気株式会社	特別顧問
1992年	岡村總吾	東京電機大学	学長
1991年	鈴木桂二	長岡技術科学大学	名誉教授
1990年	宇都宮敏男	東京理科大学 理工学部	教授
1989年	大島信太郎	国際電信電話株式会社	元 副社長
1988年	瀧保夫	東京理科大学 基礎工学部	学部長
1987年	平山博	早稲田大学 理工学部	教授
1986年	尾上守夫	株式会社 リコー	専務取締役
1985年	坂井利之	京都大学 工学部	教授
	樋渡涓二	筑波大学 電子・情報系	教授

■ 財団設立からの累計受賞者32名

■ 高柳健次郎業績賞・受賞者一覧 (1986年度～2012年度 高柳記念奨励賞)

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2014年	田中 祥次 松尾 義博	日本放送協会 放送技術研究所 伝送システム研究部 日本電気株式会社 メディアインテリジェンス研究所	上級研究員 主幹研究員
2013年	松村 欣司 高橋 敏	日本放送協会 放送技術研究所 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所	主任研究員 主席研究員
2012年	今井 亨 山田 悦久	日本放送協会 技術局 計画部 三菱電機株式会社 情報技術総合研究所 映像情報処理技術部	副部長 主席技師長
2011年	川村 龍太郎 角尾 幸保	日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所 日本電気株式会社 情報・メディアプロセッシング研究所	メディアイノベーション研究部長 主席研究員
2010年	岩館 祐一 長沼 次郎	日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 NTTエレクトロニクス株式会社 デジタル映像事業本部	主任研究員 主事
2009年	藤井 哲郎 白川 千洋 細川 地潮	東京都市大学 環境情報学部 NTTスマートコネクスト株式会社 出光興産株式会社	教授 取締役 電子材料開発C
2008年	丸山 裕孝 江藤 剛治 中村 淳一	日本放送協会 放送技術研究所 近畿大学 理工学部 アプティナ・ジャパン株式会社	主任研究員 教授 代表取締役
2007年	川添 雄彦	日本電信電話株式会社 NTTサイバーソリューション研究所	主幹研究員
2006年	金澤 勝	日本放送協会 放送技術研究所	主任研究員
2005年	八島 由幸	日本電信電話株式会社 NTTサイバースペース研究所	主幹研究員
2004年	小池 康博	慶應義塾大学 理工学部	教授
2003年	佐々木 誠	日本放送協会 放送技術研究所	デジタルネットワーク部長
2002年	大塚 作一	株式会社NTTデータ 技術開発本部	コンテンツ管理技術グループ・部長
2001年	榎 啓一 松永 真理 土井 利忠	株式会社NTTドコモ iモード事業本部 松永真理事務所 ソニー株式会社	取締役 本部長 代表取締役 執行役員上席常務
2000年	加藤 久和 村瀬 洋	日本放送協会 技術局開発センター 日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所	チーフエンジニア メディア情報研究部 Gリーダー
1999年	松山 駿介 中村 修二	富士通日立プラズマディスプレイ株式会社 日亜化学工業株式会社	専務取締役 開発部 主幹研究員
1998年	小野 定康 斎藤 敬	日本電信電話株式会社光ネットワークシステム研究所 キャノン株式会社 B製品事業本部	小野特別研究室 室長 常務取締役 本部長
1997年	篠原 紘一 村上 宏	松下電器産業株式会社 日本放送協会 放送技術研究所	AVC商品開発研究所 主担当 表示・光デバイス 部長
1996年	森 健一 寺田 昌章	株式会社東芝 オリンパス光学工業株式会社	常務取締役 取締役 第3事業部長
1995年	清水 宏紀 野村 武史	日本ビクター株式会社 TDK株式会社	取締役 ビデオ事業本部長 基礎材料研究所 部長
1994年	西脇 秀則 鷲塚 諫	三洋電機株式会社 ニューマテリアル研究所 シャープ株式会社 液晶事業本部	太陽電池研究室長 専務取締役 本部長
1993年	萩本 和男 吉田 真澄	日本電信電話株式会社 伝送システム研究所 株式会社富士通研究所 マルチメディア研究所	光通信研究部 主幹研究員 テクノロジー研究部門長付
1992年	谷岡 健吉 土屋 裕	日本放送協会 放送技術研究所 浜松ホトニクス株式会社 中央研究所	映像デバイス研究部主任研究員 所長代理
1991年	木目 健治朗 藤原 淑男	三菱電機株式会社 電子商品開発研究所 ソニー株式会社 ビジネス&プロフェッショナル開発本部	開発第3部 第4グループマネージャー 本部長
1990年	秋山 郁男 藤原 慎司	日本電気株式会社 映像開発本部 松下電器産業株式会社 情報機器研究所	第一開発部・課長 入力デバイス開発室長
1989年	江藤 良純 大島 正毅	株式会社日立製作所 中央研究所 工業技術院電子技術総合研究所	第5部 主管研究員 知能システム部 視覚情報研究室長
1988年	村上 仁己 廣田 昭	国際電信電話株式会社 上福岡研究所 日本ビクター株式会社	画像通信研究室長 取締役ビデオ研究所長
1987年	野村 龍男 木戸出 正継	日本放送協会 放送技術研究所 株式会社東芝 総合研究所	主任研究員 技術管理部 課長
1986年	安田 浩 熊田 純二	日本電信電話株式会社 複合通信研究所 日本放送協会 放送技術研究所	画像通信方式研究室長 ハイビジョン研究開発グループ

■ 財団設立からの累計受賞者(54件)78名

研究奨励賞・受賞者一覧 (1984年度～2012年度 研究助成)

年度	氏名	受賞時の所属先	年度	氏名	受賞時の所属先		
第31回 2014年	榎本 洸一郎 片山 昇 高村 陽太	新潟大学大学院 自然科学研究科 東京理科大学 理工学部 電気電子情報工学科 東京工業大学大学院 理工学研究科	助 教 助 教 助 教	第14回 1997年	笹 尾 勤 鳥 養 映子 浅 田 雅 洋	九州工業大学 情報工学部 電子情報工学科 山梨大学 工学部 電子情報工学科 東京工業大学 工学部 電気電子工学科	教 授 助 教 助 教
第30回 2013年	安 井 隆 雄 周 大 江 西 祐 希	名古屋大学大学院 工学研究科 早稲田大学大学院 情報生産システム研究科 金沢工業大学 光電相互変換デバイス研究開発センター	助 教 助 教 研究員	第13回 1996年	宮 崎 正 弘 白 井 肇 荒 川 薫	新潟大学 工学部 情報工学科 埼玉大学 工学部 機能材料工学科 明治大学 理工学部 情報科学科	教 授 助 教 助 教
第29回 2012年	延 兼 啓 純 田 中 一 晶 木 村 貴 幸	北海道大学大学院 理学研究院物理学部門 大阪大学 工学研究科 日本工業大学 工学部 電気電子工学科	助 教 特任助教 助 教	第12回 1995年	荒 川 泰 彦 山 本 節 夫 奥 村 次 徳 小 谷 一 孔	東京大学 生産技術研究所 山口大学 工学部 機能材料工学科 東京都立大学 工学部 北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科	教 授 助 教 教 授 助 教
第28回 2011年	村 岡 貴 博 井 上 亮 文 鈴 木 健 仁	東北大学 多元物質科学研究所 東京工科大学 コンピュータサイエンス学部 茨城大学 工学部 電気電子工学科	助 教 講 師 助 教	第11回 1994年	武 藤 佳 恭 林 真 至 森 迫 昭 光 酒 井 士 郎	慶応義塾大学 環境情報学部 神戸大学 工学部 電気電子工学科 信州大学 工学部 徳島大学 工学部 電気電子工学科	助 教 助 教 助 教 教 授
第27回 2010年	石 渕 久 生 山 口 実 靖 宮 崎 大 介	大阪府立大学 大学院工学研究科 工学院大学 工学部 情報通信工学科 大阪市立大学 大学院工学研究科	教 授 准教授 准教授	第10回 1993年	山 本 眞 司 若 林 真 一 田 中 國 昭 平 井 有 三	豊橋技術科学大学 工学部 知識情報工学系 広島大学 工学部 第二類 電気系 千葉大学 工学部 電気電子工学科 筑波大学 電子・情報工学系	教 授 助 教 教 授 教 授
第26回 2009年	長 谷 川 浩 海 老 原 聡 野 村 孝 徳	名古屋大学 大学院工学研究科 大阪電気通信大学 工学部 和歌山大学 システム工学部	准教授 准教授 教 授	第9回 1992年	蛭 原 健 治 篠 田 庄 司 田 坂 修 二 松 田 甚 一	熊本大学 工学部 電子情報工学科 中央大学 理工学部 名古屋工業大学 工学部 電気情報工学科 長岡技術科学大学 工学部 電気系	教 授 教 授 教 授 教 授
第25回 2008年	水 柿 義 直 多 田 和 也 石 塚 洋 一	電気通信大学 電気通信学部 兵庫県立大学 大学院工学研究科 長崎大学 工学部 電気電子工学科	准教授 准教授 准教授	第8回 1991年	新 井 宏 之 白 石 和 男 半 谷 精 一 郎 渡 辺 光 治	横浜国立大学 工学部 電子情報科学科 宇都宮大学 工学部 電気電子工学科 東京理科大学 工学部 電気工学科 東京工業大学 工学部 情報工学科	助 教 助 教 助 教 助 教
第24回 2007年	谷 井 孝 至 白 谷 正 治 岡 野 好 伸	早稲田大学 理工学術院 基幹理工学部 九州大学 システム情報科学研究院 武蔵工業大学 知識工学部 ネットワーク工学科	准教授 教 授 准教授	第7回 1990年	伊 藤 彰 義 岡 野 光 治 橘 邦 英 根 本 幾	日本大学 理工学部 電子工学科 東京大学 工学部 物理工学科 京都工芸繊維大学 工芸学部 電子情報工学科 東京電機大学 理工学部	教 授 教 授 教 授 助 教
第23回 2006年	渡 邊 慎 也	青山学院大学 理工学部 電気電子工学科	助 手	第6回 1989年	加 藤 誠 巳 小 松 尚 久 寅 市 和 男 三 橋 涉	上智大学 理工学部 電気・電子工学科 早稲田大学 理工学部 電子通信学科 筑波大学 電子・情報工学系 電気通信大学 電子情報学科	教 授 講 師 教 授 助 手
第22回 2005年	中 川 清 夫 磯 村 雅 夫	香川大学 工学部 信頼性情報システム工学科 東海大学 電子情報学部 電気電子工学科	教 授 助 教	第5回 1988年	浅 田 邦 博 吉 田 雄 二 小 柴 正 則 大 津 元 一	東京大学 工学部 電子工学科 名古屋大学 工学部 情報工学科 北海道大学 工学部 電子工学科 東京工業大学 総合理工学研究科	助 教 教 授 教 授 助 教
第21回 2004年	棟 安 実 治 鶴 殿 治 彦	関西大学 工学部 電子工学科 茨城大学 工学部 電気電子工学科	助 教 助 教	第4回 1987年	美 濃 導 彦 白 鳥 則 郎 山 田 実 巖 笹 瀬 巖	京都大学 工学部 高度情報開発実験施設 東北大学 工学部 電気通信研究所 金沢大学 工学部 電気情報工学科 慶応義塾大学 理工学部 電気電気工学科	助 手 助 教 教 授 助 手
第20回 2003年	出 口 博 之 井 須 尚 紀	同志社大学 工学部 電子工学科 三重大学 工学部	助 教 教 授	第3回 1986年	小 長 井 誠 西 川 博 昭 大 西 公 平	東京工業大学 工学部 電気・電子工学科 大阪大学 工学部 電子工学科 慶応義塾大学 理工学部 電気工学科	助 教 助 手 専 任 講 師
第19回 2002年	六 車 仁 志 木 村 宏	芝浦工業大学 工学部 電子工学科 岐阜大学 工学部 電気電子工学科	助 教 助 教	第2回 1985年	坂 内 正 夫 広 田 修 修 天 野 英 晴	東京大学 生産技術研究所 相模工業大学 情報工学科 慶応義塾大学 理工学部 電気工学科	助 教 助 教 助 手
第18回 2001年	寺 内 衛 和 西 村 俊 和 入 江 聡 小 林 春 夫	広島市立大学 情報科学部 情報工学科 立命館大学 理工学部 情報科学科 福井大学 工学部 材料開発工学科 群馬大学 工学部 電気電子工学科	助 教 助 教 助 手 助 教	第1回 1984年	斎 藤 省 吾 榊 裕 之	九州大学 総合理工学研究科 東京大学 生産技術研究所	教 授 助 教
第17回 2000年	渡 邊 高 志 長 田 康 敬 岸 田 悟 岩 月 正 見	東北大学 大学院 工学研究科 琉球大学 工学部 電気電子工学科 鳥取大学 工学部 電気電子工学科 法政大学 工学部 電気電子工学科	講 師 助 教 助 教 助 教				
第16回 1999年	大 森 裕 和 田 修 巳 山 田 功	大阪大学 大学院 工学研究科 岡山大学 工学部 電気電子工学科 山形大学 工学部 電子情報工学科	助 教 助 教 助 手				
第15回 1998年	横 矢 直 和 和 田 智 志 深 見 正	奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 東京農工大学 工学部 応用化学科 金沢工業大学 工学部 電気・電子系	教 授 助 手 助 教				

■ 財団設立からの累計受賞者(71大学100名) / 累計助成金額 19,160万円

■ 科学放送高柳賞 受賞番組並びに放送局一覧

(第28回～第43回 科学放送高柳記念賞/第44回科学放送 高柳健次郎賞)

回数/年度	受賞名	番組名	放送局名
45回 2014年	最優秀賞	NHKスペシャル「アルツハイマー病をくい止める!」	日本放送協会
	優秀賞	テレビ東京系列「カンブリア宮殿」ノーベル賞御用達!光の技術を極める超絶企業」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	TOYAから明日へ!「氷の島のメッセージ」～グリーンランド温暖化の最前線から～	北海道テレビ放送株式会社
44回 2013年	高柳健次郎賞	未来世紀ジバング～"アルマ展望台"プロジェクト	株式会社テレビ東京
	奨励賞	NHKスペシャル「世界初撮影! 深海の巨大イカ」	日本放送協会
	奨励賞	生命38億年スペシャル・最新遺伝子ミステリー「人間とは何だ…!」	株式会社TBSテレビ
43回 2012年	高柳記念賞	NHKスペシャル「宇宙の渚」第1集・謎の閃光 スプライト	日本放送協会
	奨励賞	KBSふるさとスペシャル「未来を回せ～富山発・小水力発電の可能性～」	北日本放送株式会社
	奨励賞	「風を集めて」レンズ風車」未来への挑戦」	RKB毎日放送株式会社
42回 2011年	高柳記念賞	「クニマスは生きていた!」	株式会社毎日放送
	奨励賞	コズミック フロント ～発見!驚異の大宇宙～「迫りくる太陽の異変」	日本放送協会
	奨励賞	チャンネル4「三兄弟が挑んだ命の鼓動～国産初・植込み型補助人工心臓開発物語～」	株式会社テレビ信州
41回 2010年	高柳記念賞	「神の鳥からの警告」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「ハッブル宇宙望遠鏡 宇宙の始まりに挑む」	日本放送協会
	企画賞	「人類よ 宇宙人になれ 立花隆VS小学生」	日本放送協会
	企画賞	「ノンフィクションW」街が踊る!ビルが笑う!デジタルサイネージで変わる世界	株式会社WOWOW
40回 2009年	高柳記念賞	クエスト～探求者たち～ 宇宙エレベーターで宇宙へ! 青木義男教授の挑戦	株式会社WOWOW
	奨励賞	富山湾・あいの海	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「病の起源 第4集 読字障害～文字が生んだ病」	日本放送協会
	企画賞	ニッポンの恐竜はどこから来たのか	福井放送株式会社
39回 2008年	高柳記念賞	素敵な宇宙船地球号「世界遺産の光と影～屋久島のいのちの森」	株式会社テレビ朝日
	奨励賞	めんたいキッズ08～こどもたちが番組作りに挑戦～	株式会社福岡放送
	奨励賞	NHKスペシャル「眠れる再生力をよびませ～脳梗塞・心筋梗塞への挑戦～」	日本放送協会
	企画賞	探Qサイエンス	株式会社テレビ西日本
38回 2007年	高柳記念賞	NHKスペシャル「赤ちゃん 成長の不思議な道のり」	日本放送協会
	奨励賞	因島造船物語 撓鉄と生きる人々	株式会社テレビ新広島
	奨励賞	豊なる干潟～坂田明が見た豊前海の神秘～	大分朝日放送株式会社
	企画賞	素敵な宇宙船地球号「CO2スリム大作戦」	株式会社テレビ朝日
37回 2006年	高柳記念賞	カナリヤの子供たち～検証・化学物質過敏症～	日本テレビ放送網株式会社
	奨励賞	ガイアの夜明け「最先端!オーダーメイド医療～あなただけの治療法選べます～」	株式会社テレビ東京
	奨励賞	SBSスペシャル「秋津の岸辺」	静岡放送株式会社
	企画賞	素敵な宇宙船地球号シリーズ ミクロの生命体「微生物ハンターが人類を救う」	株式会社テレビ朝日

回数/年度	高柳記念賞	高柳記念奨励賞	高柳記念企画賞
36回 2005年	中京テレビ放送株式会社 感染症の世紀～ウイルスハンター～人類の終わりなき闘い	北海道テレビ放送株式会社 株式会社テレビ東京	日本放送協会
35回 2004年	日本放送協会 地球ふしぎ大自然「幻想!夜に草原が輝く ブラジル光るアリ塚の謎」	北陸放送株式会社 テレビ愛知株式会社	株式会社TBSテレビ
34回 2003年	テレビ愛知株式会社 よみがえれ三河湾!～スナメリのいる海～	株式会社テレビ東京	株式会社テレビ朝日
33回 2002年	南海放送株式会社 クマガイ草ー小さな村の小さな奇跡の物語	テレビ愛知株式会社 株式会社サガテレビ	日本放送協会
32回 2001年	株式会社テレビ宮崎 サイエンスドキュメンタリー「天空の大爆発 赤いオーロラを追え!」	日本放送協会 全国朝日放送株式会社	共同制作:日本テレビ放送網 札幌テレビ放送株式会社
31回 2000年	日本放送協会 NHKスペシャル「テクノロジー・あくなき挑戦～摩擦の壁をうち破れ」	株式会社テレビユー福島 株式会社テレビ東京	東海テレビ株式会社

■ 第1回～第27回 科学放送振興協会 主催 (うち、第16回～第27回 高柳記念財団 後援)/ 第28回～ 高柳記念財団・高柳健次郎財団 主催

■ 役員名簿

会長	高柳 俊	前理事長
理事	末松 安晴 (非常勤)	理事長 東京工業大学栄誉教授
	羽鳥 光俊 (非常勤)	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
	松崎 淳嗣 (非常勤)	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
	浜田 泰人 (非常勤)	日本放送協会 理事・技師長
	篠原 弘道 (非常勤)	日本電信電話株式会社 代表取締役副社長
	鶴田 雅彦 (非常勤)	元日本ビクター株式会社 取締役・技術本部長
	坂井 勝則 (常勤)	専務理事・事務局長
評議員	下邨 昭三 (非常勤)	元科学技術庁 事務次官
	相磯 秀夫 (非常勤)	東京工科大学 理事・名誉教授 慶應義塾大学名誉教授
	餌取 章男 (非常勤)	科学ジャーナリスト
	藤本 正熙 (非常勤)	一般社団法人日本オーディオ協会 顧問
	廣田 昭 (非常勤)	元日本ビクター株式会社 取締役・ビデオ研究所長
	井上 勇三 (非常勤)	株式会社東京放送ホールディングス 社長室顧問
	吉野 武彦 (非常勤)	日本放送協会 元専務理事・技師長
	桂 靖雄 (非常勤)	パナソニック株式会社 客員・元代表取締役副社長
	寺崎 明 (非常勤)	株式会社NTTドコモ 代表取締役副社長
監事	飛田 和男 (非常勤)	株式会社ネクストジェン 元常勤監査役
	並木 康臣 (非常勤)	元日本ビクター株式会社 理事・渉外部長

■ 委員名簿

〈選考委員会〉

- ・電子科学技術の分野で独創的な研究に取り組む若い研究者への研究奨励賞の選考
- ・電子科学技術の分野で優れた研究業績により、科学技術並びに産業の発展に貢献された方々の功績に対する高柳健次郎賞・同業績賞の選考

委員長	羽鳥 光俊	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
委員	後藤 敏	早稲田大学 名誉教授
	荒井 滋久	東京工業大学 量子ナノエレクトロニクス研究センター 教授
	黒田 徹	日本放送協会 副技師長 放送技術研究所 所長
	藤田 敏昭	日本電信電話株式会社 常務理事 サービスイノベーション総合研究所 所長

〈審査委員会〉

国内の放送局でテレビ放映された優れた科学放送番組に対する科学放送高柳賞(最優秀賞・優秀賞)の審査

委員長	餌取 章男	科学ジャーナリスト
副委員長	松崎 淳嗣	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
副委員長	奥野花代子	神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員
委員	相生 啓子	特定非営利法人日本国際湿地保全連合 顧問
	青木 恒夫	元日本ビクター株式会社 コーポレートコミュニケーション部長
	榎並 和雅	国立大学法人東京工業大学 監事(常勤)
	栗原 祐司	東京国立博物館 総務部長
	竹中 一夫	スカパーJSAT株式会社 顧問
	元村有希子	株式会社毎日新聞社 編集編成局デジタル報道センター 編集委員
	森 健一	東京理科大学MOT大学院 教授
	由利 伸子	有限会社サイテック・コミュニケーションズ 代表取締役

公益財団法人 高柳健次郎財団

〒102-0082 東京都千代田区一番町4番地5 ニューライフー番町309

TEL: 03-3239-1207 FAX: 03-3262-3028

E-mail: tkinenz@oak.ocn.ne.jp

Kenjiro Takayanagi Foundation

4-5-309, Ichiban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082 Japan

Tel: +81-3-3239-1207 Fax: +81-3-3262-3028

<http://takayanagi.or.jp>